古街について

宇多津古街は、背山臨水

背には、讃岐富士の飯野山、東は聖通寺山、西は青の山に囲まれ、眼前に穏やかな瀬戸内海がひろがる宇多津古街は、風水でいう「背山臨水」の地。背に山があり、前方に水がある都市は、人が暮らしやすい土地といわれています。
7世紀にはすでに自然港ができあがっており、中世には、四国を代表する港町として栄えてきました。
室町時代から明治時代にかけて、町を囲む山々には、約三十もの寺社が立ち並んでいたといわれて、現在も一社九カ寺が並び、寺院との古街の暮らしが結びついています。
心穏やかな空気が流れる、宇多津古街を散策してみませんか。

古街の暮らし　～祠のあるまち～

路地を行くと、各町ごとに祀られている神社を見かけます。コミュニティー分館と兼用されているところもあり、また、街角には木造の金毘羅灯籠があり、町民が交代で火を灯していたといいます。社（やしろ）や祠（ほこら）が人々を繋ぎとめ、生活を支える場ともなっています。江戸時代以来、こうした暮らしが少しずつ形を変えながら、現在にも息づいてきたのです。

地割

江戸時代に古街の都市計画はほぼ完成し、明治・大正・昭和を経て現在まで受け継がれることになりました。丸亀街道と金毘羅街道を軸線として、格子状に街路が形づくられています。先人たちの鋭意（都市計画）が、現在のまちの美しさ、暮らしやすさにもつながっています。

町と町名

街路をはさんで向かいあう家々が一つの町をつくっています。江戸時代以来の歴史をもつ、本町・浦町・今市・鍛冶屋町・水主町（かごまち）・伊勢町・倉の前・浜町・西町・横町・海岸町・山下・大門・田町・新町・塩浜などがこれにあたります。現在の自治会は、この町名とまとまりを引き継いでいます。

宇多津の歴史を伝える絵馬

「網浦眺望青山之真景」1855年（安政２年）

宇多津の繁栄を願って町人有志が宇夫階神社に奉納しました。海上から宇多津の町を俯瞰する構図で描かれています。瀬戸内海に開かれた海上都市であったことを物語ります。複製が宇夫階神社金刀比羅社・香川県立ミュージアムにあります。

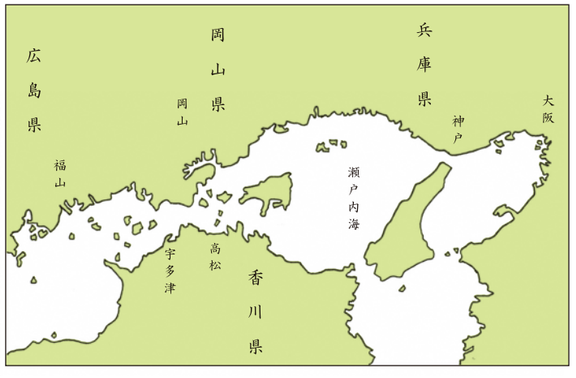
問い合わせ
宇多津町役場　まちづくり課
〒769-0292　香川県綾歌郡宇多津町 1881 番地
電話：0877-49-8009　Email：machi@town.utazu.kagawa.jp

宇多津「古街」への道のり

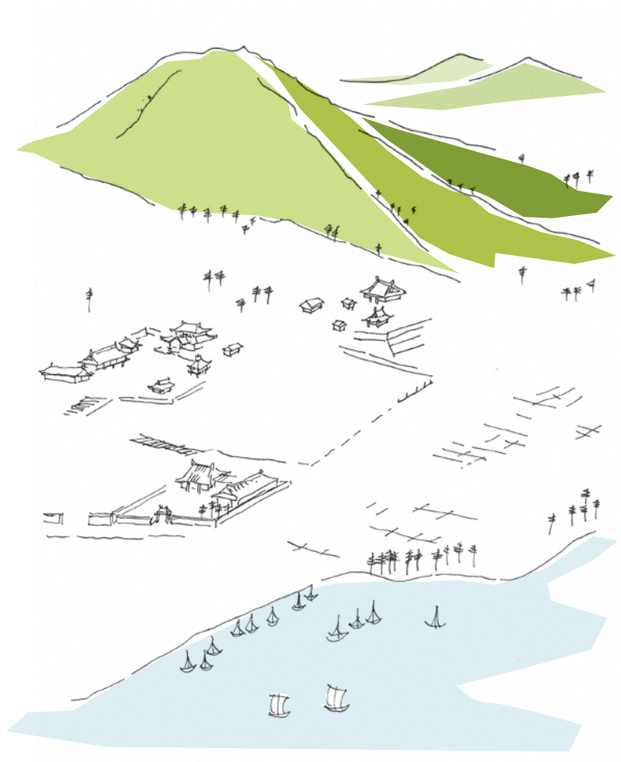
高松駅から
電車で快速 20 分・普通 30 分　→　宇多津駅から徒歩 15 分

岡山駅から
電車で特急 40 分　→　宇多津駅から徒歩 15 分

高松空港から
車で 50 分
リムジンバスで 60 分　→　宇多津駅から徒歩 15 分



宇多津「古街」散策絵地図



古街と町家

古街には、江戸時代末期から昭和初期の町家が残っています。町家は、伝統的な都市建築で、間口が狭く、奥行きの長い「うなぎの寝床」（短冊形）の敷地に建てられます。虫籠窓や出格子の持ち送りが手堅くまとめられていて、おとなしい表構え。しかし、明治期の早い時期に洋間を取り入れ、上質の御影石をふんだんに使うなど、確かな技術と手間をかけた町家が多く、通りに面して「平入り」で、主屋の横に離れ座敷を持つ大型の町家が道路境に塀をつくり、宇多津独特の景観をなしています。

町家の間取り

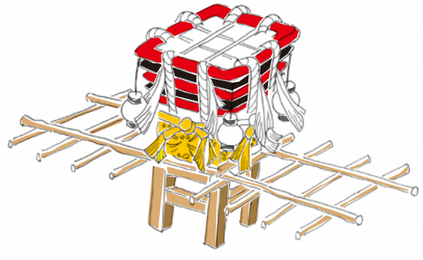
町家内部の片側には、通りから中庭に抜ける土間があり、通路や炊事場の役割を果たしました。もう片側には居室が並び、通りに面する部屋がミセと呼ばれる接客空間で、その奥には生活空間にあたる台所や座敷がありました。

宇多津で見られる町家の種類

▼厨子二階（つしにかい）建て
　明治後期まで一般的に建築された様式。
　２階の階高が低い。２階の窓は虫籠窓が多い。
▼総二階建てまたは本二階建て
　明治後期から昭和初期に建築された様式。
　１階と２階の階高が同じでガラス窓が入る。

まつりについて

宇多津古街には、人々の間に伝わってきた多くの行事があります。

＜1 月＞　初釜神事（復元塩田）
＜3 月初旬の土日＞　うたづの町家とおひなさん
（各家の雛人形を公開）
＜5 月＞　金毘羅春市（宇夫階神社境内）・西光寺市（西光寺）
平山祭（平山神社）
＜7 月＞　朔日祭（宇夫階神社）（旧暦 6 月 1 日）
＜7 月＞　十七夜祭（神石神社）（旧暦 6 月 17 日）
＜8 月＞　早祓祭・茅の輪くぐり（宇夫階神社）（旧暦 7 月 1 日）
＜8 月 16 日＞　閻魔堂ご開帳・地獄極楽図の絵解き（浄泉寺）
＜8 月＞　灯篭流し（各寺）
＜10 月第４土日＞　秋の例大祭（宇夫階神社）

秋の例大祭は、神輿行列と太鼓台が街中を練り歩き、狭い路地に似合う風情を醸し出している。